

<研究ノート>

## X + 動詞連用形複合語の記述的整理： 音韻論的特徴を中心に

田川 拓海\*

### A Descriptive Note on Deverbal Compounds in Japanese: With Emphasis on Their Phonological Behavior

TAGAWA Takumi\*

#### 1. はじめに

##### 1. 1 目的

本稿は、多様な「X+動詞連用形」という形式をとる複合語の分析への足がかりとして、その記述の整理を試みる。具体的には、生成文法、特に語彙意味論の観点からの説明を試みている杉岡（2002）の記述と分析<sup>1)</sup>を概観し、連濁と語アクセントという二つの音韻論的特徴に関する記述に問題があることを具体的な例を挙げながら示す。

##### 1. 2 分析対象

本稿で分析対象とするのは、「X+動詞連用形」という形式をとる、以下のような複合語である。

- (1)a. 太郎は窓拭きが嫌いだ。  
b. その書類は手書きにしてください。

杉岡（2002）では「動詞由来複合語（deverbal compound）」と呼ばれているが、本稿では杉岡（2002）では取り上げられていないようなタイプの複合語にも言及することがあるため、以降、同様の形式をとる複合語を一律「X+動詞連用形複合語」と呼ぶこととする。

#### 2. 先行研究：杉岡（2002）

##### 2. 1 内項の複合と付加詞の複合

杉岡（2002）では、まずX+動詞連用形複合語をXに入る要素と動詞連用形の部分の意味論的關係から、大きく「内項の複合」と「付加詞の複合」に分ける。

- (2)a. 内項の複合：窓拭き (cf. 窓を拭く)  
b. 付加詞の複合：手書き (cf. 手で書く)

この分類は、その意味論的關係だけを根拠としているわけではなく、内項の複合と付加詞

\* 情報コミュニケーション学部非常勤講師、Tsukuba Gakuin University

1) 杉岡（2002）でも引用されている Sugioka（2002）という研究も存在するが、その記述、分析については同じ内容であると判断したため、本稿では杉岡（2002）で代表させることとする。

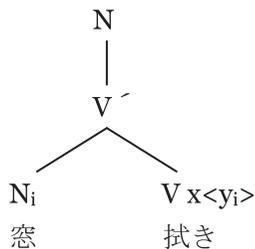
の複合の現象上の相違点に基いている。特に、(3)の文法的特徴は内項の複合と付加詞の複合を区別する十分な根拠を示していると考えられる。

(3)「する」を付加して動詞として用いることができるか

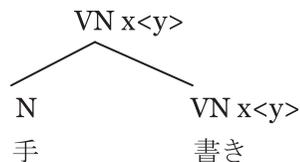
- a. 内項の複合：できない<sup>2)</sup>：\*窓拭きする (cf. 窓ふきをする)
- b. 付加詞の複合：できる：手書きする

杉岡 (2002) は、以下のような形態構造の違いを提案し、さらに語彙概念構造 (LCS) も導入してその振る舞いの違いを捉えようとしている。

(4)a. 内項の複合



b. 付加詞の複合



例えば、付加詞の複合語が「する」をとるのか、それとも「だ」をとって状態述語を形成するのか、といったような問題に対しては語彙概念構造によるアプローチが有効であるように思われるが、本稿で問題として取り上げるのは、「以上のような構造の違いは、こ

れら2種類の複合語の音韻に反映されている (杉岡 (2002) : 125)」として取り上げられている、語アクセントと連濁という二つの音韻論的現象についてである。

## 2. 2 形態構造と2つの音韻論的現象

### 2. 2. 1 語アクセント

まず、杉岡 (2002) は内項の複合と付加詞の複合の次のような語アクセントの違いに着目する。

- (5)a. 内項の複合 : ほんよ<sup>3)</sup>み<sup>3)</sup> (本読み)
  - b. 付加詞の複合 : ぼーよみ (棒読み)、たちよみ (立ち読み)
- (杉岡 (2002) : 126、一部改変)

(5)の対比に見られるように、内項の複合の場合はその語アクセントが起伏型になるのに対して、付加詞の複合の場合は平板アクセントとなる。杉岡 (2002) はこれを動詞連用形の以下のような環境におけるアクセントの現れの違いと結び付けて分析している。

- (6)a. 不定詞 (動詞) 用法: 本を読みに行くよ<sup>3)</sup>みに
  - b. 名詞用法 : 本の読みが浅いよみ<sup>3)</sup>が
- (杉岡 (2002) : 126、一部改変)

すなわち、内項の複合の構造 ((4a)) では右側の要素 (動詞連用形の部分) が動詞であるので、(6a)の環境に相当し起伏型の語アクセントパターンになるのに対して、付加詞の複合の構造 ((4b)) では動詞連用形の部分は名詞なので、それを反映したアクセントにな

2) 「値下げする」のような、この一般化に当てはまらない例に対しては、「XのYを (動詞)」の「Y+動詞」の部分が再分析されたもの、という分析が提案されている。詳細は杉岡 (2002) : 113を参照されたい。

3) 以降、アクセント核の位置を記号「<sup>3)</sup>」で示す。

ると説明する(杉岡(2002):126)。また、両方の環境で平板型アクセントとなる動詞の場合はそれが複合語にも反映されどちらの複合の場合も平板型アクセントとなるとし、次のような例が挙げられている。

- (7)a. 内項の複合 : 人買い(ひとかい)、  
金貸し(かねかし)  
b. 付加詞の複合: まとめ買い(まとめ  
がい)、また貸し(またがし)  
(杉岡(2002):127、一部改変)

## 2. 2. 2 連濁

さらに杉岡(2002)は以下のようなペアを挙げて、内項の複合が連濁をほとんど示さないのに対して、付加詞の複合はほぼすべて連濁するという一般化を示し、それも(4)に示されている両者の形態構造の違いに起因していると提案している。

- (8)内項の複合/付加詞の複合  
汗拭き、窓拭き(ふき)/空拭き、モップ拭き(ぶき)  
ふとん干し、もの干し(ほし)/蔭干し(ぼし)  
手紙書き、小説書き(かき)/手書き、走り書き(がき)  
パン切り、腹切り、缶切り(きり)/厚切り、四つ切り(ぎり)  
牛飼い、羊飼い(かい)/放し飼い、子飼い(がい)  
ズボン吊り、首吊り(つり)/さかさ吊り、宙吊り(づり)  
はえ叩き、肩叩き、もぐら叩き(たたき)/袋叩き(だたき)  
(杉岡(2002):127)

具体的には、内項の複合が主要部を持たない外心構造を成し((4a))、付加詞の複合語は右側が主要部である内心構造を成している((4b))という違いを、名詞の複合の場合において右側が主要部である場合には連濁が起り(里子(さとご)、苗木(なえぎ))並列の複合の場合には連濁が起らない(親子(おやこ)、草木(くさき))という現象と平行的に捉えその形態構造に連濁の可否を帰している<sup>4)</sup>。

## 2. 3 まとめ

前節で簡単にまとめたように、杉岡(2002)はX+動詞連用形複合語の見せる語アクセントと連濁に関する振る舞いについて、「内項の複合と付加詞の複合が示す音韻的な違いが、内項の複合は右側要素が動詞で外心構造をもち、付加詞の複合は右側要素が名詞で内心構造をもつという、ここで述べてきた分析によって説明できる(杉岡(2002):128)」と主張している。杉岡(2002)のX+動詞連用形複合語に対する分析の全体のまとめは以下のように提示されている。

(9)

	内項の複合	付加詞の複合
例	ゴミひろい	手書き、薄切り
指示物	動作の名前	複雑述語(動作・状態)
品詞	普通名詞	動作性名詞、述語名詞
構造	外心構造	内心構造
連用形のアクセント	動詞アクセント	名詞アクセント
連濁	起こさない	起こす
レベル	項構造	LCS

(杉岡(2002):130)

4) これは、「殴り殺す」などの複合動詞について「動詞複合語が、意味的には右側主要部と考えられる(影山1993)ものの、少なくとも形態的には「動詞+動詞」という並列の構造を取ることで、名詞の並列複合語(親子など)と同様、連濁の起る環境ではないと考えられる(杉岡(2002):136-137)」という提案をしているところからもうかがえる。

### 3. 杉岡 (2002) の問題点

本節では、主に現象に対する記述を中心に、杉岡 (2002) の問題点を指摘する。

#### 3. 1 語アクセント

杉岡 (2002) は動詞連用形部分が2モーラのものに議論を限っているが、内項の複合語を幅広く見ていくと、その中でもいくつか一般化から外れる例が存在する<sup>5)</sup>。

(10) 動詞用法のアクセントは起伏型であるが、複合語は平板型になるもの

- a. 軸受け (試験を受<sup>レ</sup>け、<sup>6)</sup>)
- b. 絵描き (絵を描<sup>ク</sup>き、)

(11) 動詞用法のアクセントは平板型であるが、複合語は起伏型になるもの

- a. バイオリン<sup>ク</sup> 弾き (バイオリンを弾き、)
- b. 栓抜<sup>ク</sup> き (栓を抜き、)

そもそも語幹が2モーラの動詞はそれほど多くない上に、杉岡 (2002) 自体が「読む」、「書く」、「蹴る」、「とる」などの少数の例から一般化を導いているので、これらの例の存在は問題となってくると考えられるが、これらの例が例外として除外できるほど少数であるのかはさらに多くの動詞、複合語について検証しなければならない。

ただ、(10)、(11) で挙げた例は全て「動作の名前」ではなく、「人間 (絵描き、バイオリン弾き)」、「道具 (軸受け、栓抜き)」であり (分類については影山 (1993) : 187-190を参照)、内項の複合自体の分類を詳細にすることによって問題ではなくなる可能性もある。

#### 3. 2 連濁

連濁に関しては、多くの例が挙げられているが、その一般化に合致しない例も多く存在する。語アクセントの場合と同様に、付加詞の複合語ではなく内項の複合に多く見られる様である。杉岡 (2002) でも「人殺し (ごろし)」、「米作り (づくり)」のような例外の存在とその取扱いについては言及しているが、それ以外にも以下のようなものがある。

(12) 内項の複合で連濁を起こすもの

ude-gumi (腕組み), mise-jimai (店じまい), ude-damesi (腕試し), tii-gatame (地位固め), umi-biraki (海開き), hyo-gatame (票固め), moyoo-gae (模様替え), itoma-goi (暇乞い), on-gaesi (恩返し), usa-barasi (憂さ晴らし), te-banasi (手放し), kuji-biki (くじ引き), tikara-zoe (力添え), kuti-zoe (口添え), kuti-zuke (口付け), kokoro-zukai (心遣い), mono-goi (物乞い), tooge-goe (峠越え), sina-gire (品切れ), kigen-gire (期限切れ), kokoro-gawari (心変わり), ki-zukare (気疲れ), kami-zumari (紙詰まり), hi-gure (日暮れ), hi-damari (日溜り), …

杉岡 (2002) では語幹が3モーラの動詞の場合は単独でも名詞になるため例外を生みやすいのではないかという推測が述べられているが、上記の例には通常単独では名詞にならないもの、2モーラの例も含まれている。

また、これらのものは3. 1で述べたような「人間」「道具」などに偏ることなく、「動作の名前」にもその例を多く見つけることが

5) 以下、語アクセントの内省は全て筆者の内省に基いて記述した。

6) 「～に行く」という環境ではテストできる動詞が動作動詞に限られるなどの制限があるため、以降動詞用法の語アクセントは連用形中止法の環境で示すこととする。

できるため、杉岡（2002）の一般化にとってはより問題であると考えられる。

### 3. 3 その他の問題：項の場所要素の複合

さらに、杉岡（2002）では取り上げられていないが、X+動詞連用形複合語のXに「場所（二格）」要素が入る場合の取り扱いをどうするのか、という問題も存在する。

- (13)a. hako-zume (箱詰め) cf. 箱に詰<sup>7</sup>め、  
 b. gakkoo-gayoi (学校通い) cf. 学校に通い、  
 c. 袋詰め、瓶詰め、土俵入り、東京行き、棚置き、棚上げ…

問題は、意味論的にはこれらの場所要素は項であるということである。少なくとも杉岡（2002）で採用されている枠組みでは付加詞の複合と考えることはできないのであるが、その音韻論的振る舞いを見てみると付加詞の複合に近い振る舞いをする。基本的に連濁を起こし（(13a, b)）、また動詞用法の場合に起伏型の語アクセントであったとしても、複合した場合には平板型になる<sup>7)</sup>((13a))。

内項の複合をさらに限定して「直接内項の複合」とすれば杉岡（2002）の一般化に関しては問題にならないであろうが、場所要素の複合は少数の例外とは言いきれないほどこれらの複合語の中では比較的生産的であるため、その取り扱いをどうするのかという問題は、X+動詞連用形複合語に関する研究を進める上で考察していかなければならない。

## 4. 問題点および今後の課題

以上、本稿ではX+動詞連用形複合語に対

する杉岡（2002）の記述と分析を取り上げ、その問題点について主に現象記述の観点からいくつか整理した。本節では問題点や課題について述べる。

### 4. 1 形容詞複合語との関係

特に連濁は形容詞複合語にも関連してくる問題である。

#### (14) 形容詞の複合語

- a. 名詞+形容詞：息苦しい、肌寒い、罪深い、遠慮深い、名高い、縁遠い、心強い、口汚い、腹黒い、根深い、奥深い、印象深い、…  
 b. 形容詞+形容詞：赤黒い、青白い、ずる賢い、浅黒い、甘酸っぱい、薄汚い、…

もちろん例外もいくつか存在するが、(14)に見られるように、複合語の右側の要素が形容詞である場合は、その左側にくる要素の範疇に関わらず多くが連濁を起こす。

もし杉岡（2002）のアプローチを敷衍して形態構造から連濁の可否を捉えようとする、(14b)が問題となる。まず左側の要素について考えると、現代日本語では形容詞の語幹の形態は少数の色に関する形容詞を除いて名詞として生起することはないため、その範疇を名詞と考えることはできない。もちろん、動詞であるとも考えられないのでこの要素の範疇は形容詞であるということになる。また、右側の要素についても動詞の複合語の場合と異なり、そのまま形容詞の屈折を示す<sup>8)</sup>のでやはり形容詞と考えるのが妥当であろう。そうすると、形態構造としては形容詞-形容詞という並列構造となり、連濁が起

7) (13b)では逆に動詞用法の場合には平板型であるのに複合語では起伏型となっているが、語幹が3モーラの場合にはもと内項の複合の場合でもそういう例が少なくないため、分けて考える必要がある。

8) この動詞と形容詞が見せる複合語の相違点についての記述、分析は田川（2005, 2009）を参照されたい。

こらないことが予測されるのである。

これはそもそも「並列構造は連濁を引き起こさない(引き起こしにくい)」という一般化自体にとって問題であり、さらに杉岡(2002)は焦点を動詞に絞った研究であるので、杉岡(2002)の分析やその問題点という観点からは離れるが、複合語の分析、さらにその音韻論的特徴との関連を考えた際には避けて通れない問題であろう。引き続き考察を進めていきたい。

#### 4. 2 音韻論的観点から

もちろん、本稿で取り上げた現象については形態論、語彙意味論的アプローチが重要なのであるが、語アクセント、連濁に関しては音韻論的観点からの考察も合わせて考えなければならないであろう。

すでに論じたように杉岡(2002)でも考慮されているが、語アクセントの議論に関しては各要素のモーラ数とさらに語形全体のモーラ数も重要な要因として働く。例えば、「蹴り」は2モーラ名詞「石」と複合した場合は動詞用法のアクセントをそのまま引き継ぐが、3モーラ名詞である「ボール」と複合した場合は異なったアクセントパターンを見せるように思われる。

- (15)a. 石を蹴<sup>1</sup>り、  
 b. いしけ<sup>1</sup>り(石蹴り)  
 c. ボール<sup>1</sup>蹴り

(15c)もやはり全体としては起伏型であるので、内項の複合の場合はそのアクセントの位置ではなく、動詞連用形部分の起伏型/平板型というような特徴が引き継がれるという一般化をすれば良いということであろうが、杉岡(2002)では論じられなかった動詞語幹部分が3モーラ(以上)である場合も含めてより多くの例を考察の対象に含め分析していく必要がある。

#### 4. 3 おわりに

本稿では杉岡(2002)の記述、分析にとって問題となる可能性のある例を提示するにとどまり、動詞や複合語の例を広く調査する段階まで進めることができなかった。もともと語形成の研究では例外や語彙的欠落(lexical gap)の存在を避けて通ることができないため、多数、また多様な用例を用いた研究を展開していきたい。

さらに本稿で示した杉岡(2002)にとって問題となる現象は内項の複合の場合に限られ、付加詞の複合には同様の現象を発見することはできなかったことも合わせて記しておきたい。今後も調査は継続していくが、この事実はやはり杉岡(2002)で示された内項/付加詞の複合という大まかな分類自体は、X+動詞連用形複合語についての研究を行う上で有用であることを示していると考えている。

本稿では先行研究の検討と記述の整理に焦点を絞ったため取り上げることはできなかったが、本稿で取り上げた現象群が杉岡(2002)のようなアプローチにとって致命的なものとなりうるのか、それともその理論の拡張によって捉えることが出来るのかどうかは、やはり本稿で言及することのできなかった、他の先行研究の検討および、筆者がX+動詞連用形複合語の一部も対象とし、田川(2005, 2007, 2009)で進めてきた、語形成に対する統語論的アプローチの妥当性を検証していく過程と合わせて今後考察を深めていきたい。

#### 参考文献

- Ito, Junko and Armin Mester (2003) *Japanese Morphophonemics*. MIT Press.  
 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房。  
 杉岡洋子(2002)「第3章 複数のレベルにまたがる語形成」『語の仕組みと語形成』pp.69-145 研究社

Sugioka, Yoko (2002) "Incorporation vs. Modification in Deverbal Compounds," *Japanese/Korean Linguistics* 10: 495-508.

田川拓海 (2005) 「動詞と形容詞の形態統語論的相違点について」『筑波応用言語学研究』12: 71-84.

田川拓海 (2007) 「二種類の範疇変化とその構造的定義：否定の接頭辞と右側主要部の規則」『言語学論叢』26: 1-15.

田川拓海 (2009) 「分散形態論による動詞の活用と語形成の研究」筑波大学博士(言語学)学位請求論文.